NPO法人棚田ネットワーク会報誌　第126号

棚田に吹く風

2023
冬
Winter
季刊

2 新春企画
新旧代表対談「棚田ネットワークのこれまでとこれから」
5 フォトエッセイ
日本の原風景「古志の里」
6 棚田・里山からのたより
土佐・本山　天空の棚田群
～人をつなぎ、未来へつなぐ棚田～
高知県長岡郡本山町の棚田
8 地域おこし協力隊棚田班
生きもの屋の里山考
9 棚田博士は今日も行く
別府市街地北郊の棚田
大分県別府市内竜
12 読者のひろば
14 エコプロ2022レポート
15 Project Report

新春企画

新旧代表対談

棚田ネットワークのこれまでとこれから

名誉代表　**中島　峰広**

×

新代表　**杉山　行男**

昨年当会の代表に就任した杉山行男と名誉代表になった中島峰広が、これまでの活動を振り返りこれからの棚田ネットワークを語ります。

―　お二人の出逢いについてお聞かせください。

中島峰広名誉代表（以下：中島）

杉山代表と出会ったのは恵那でしたね。

杉山行男代表（以下：杉山）

１９９９年、岐阜県恵那市坂折棚田の整備の際、市役所に関係者と学識経験者との整備保全検討委員会を設置し、先生に委員長をしていただいた時です。私はその当時、現場の所長をしており、石積み棚田を残すか整備するか、農家だけでなく先史文化研究会などの市民団体も加わり、議論が分かれていました。そのうち、バンダナをまいたおじさんが事務所にきて「整備に反対はしないが、どうするつもりか」とのこと。名刺にはふるさときゃらばんとあり、石塚さんとの出会いでもありました。それまでの、未整備の効率の悪い圃場という意識から、棚田を特別な目で見始めた最初でした。当会の設立は１９９５年でしたよね。

中島

椿原町での第１回棚田サミットの後、厳しい棚田の状況を話し合える場が欲しいとなったのですね。関東近辺の棚田連絡協議会の個人会員を中心に集まる会を立ち上げ、発足当初は、喫茶店などで共通の想いを語り合うといった自然発生的な活動でした。１９９６年４月に機関誌「棚田に吹く風」が発行され、棚田の啓蒙と支援の現地活動を模索しながら組織体制が整備され、新宿区の居酒屋「新浪漫亭」の二階に事務所が設けられたのです。

杉山

設立当初は、会員の棚田に対する思いも様々だったのでしょうね。

中島

会員の想いと棚田を普及し会員を増やすために、色々な講師を頼んでセミナーや勉強会を開催しましたね。「連続講座・棚田」、「棚田の学校」、２００６年から２０１１年までは「東京棚田フェスティバル」を開催しました。

杉山 都市部からの現地活動は、難しいこともおありだったと思いますが。

中島 長野県八坂村に住んでいた会員の田んぼを借りて農作業体験がようやく実現したのですね。その後、鴨川の大山千枚田保存会が、棚田ネットの復田や稲作体験を行う活動を受け入れてくれたのですが、あれは鴨川の棚田オーナー制度の立ち上げや第8回全国棚田サミットの開催の実現に結びついたと思います。2003年イオン財団の助成金により「棚田協力隊プロジェクト」として新潟県松之山町の棚田で保全活動をしたのですが、県の保全組織の単なる作業手伝いのような形になり、あまりうまくいかなかった気がしますね。一方、2003年からは、新潟県トキ基金の助成を得てトキの自然放鳥のためのえさ場となるビオトープをつくるボランティアツアーを毎年7月に実施しました。

杉山 **少しずつ棚田の社会的認知が高まり、企業のCSR活動で棚田への協力が増えていきました。**

中島 外資系製薬会社のアストラゼネカは規模が大きかったですね。あれは東京ボランティアセンターから、過疎高齢化した地域への活動を全国展開したい企業があると当会に紹介があったのですよ。そこで、私が知っている保全団体を紹介し実現しましたが、全社員が3000人と大きく、沖縄まで組織があり、最初の年は沖縄から飛行機で佐賀の蕨野の棚田まで来て活動した支社もあったと思います。5年間続けて、広く知られるようになったのですが、その後、東日本大震災が発生し、そちらの活動へ移行したようです。

杉山 エコプロ展での「日本の棚田共同展示」も大きな活動になりましたね。

中島 最初はボランティア団体の1つとして棚田ネットワーク単独で2003年に初めて出展し、実績を積み重ねたのです。そして、2012年に棚田関連7団体で共同出展し、2014年からは棚田連絡協議会から受託し、14団体に増え、増減を繰り返しながら現在まで続いています。今では、棚田連絡協議会の大きな活動のひとつとなっていると思います。

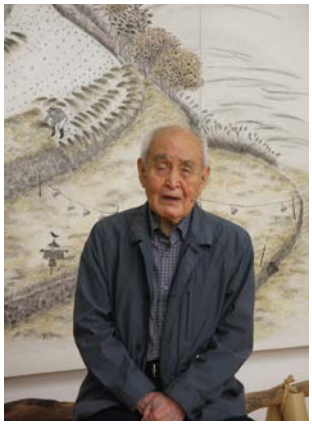
杉山 会の活動の集大成として『全国棚田ガイド』を2017年に発行できました。

中島 私は『日本の棚田』などのいくつかの本を出版してきましたが、全国の棚田を網羅した一般向けのガイドが欲しいとの声は以前からあったのです。全国の島を紹介したSHIMADASを参考に企画案を練り、いくつかの出版社とも相談の結果、頑張れば何とかなるとの思いからスタートしました。経費的な面から、原稿の作成やレイアウト、写真の収集などは会員の自前の作業で行い、最終段階の校正のみ出版社がチェックし、発行部数のかなりな部分を会が買い取るという約束でようやく実現しました。発行後は棚田関係者ばかりでなく、各地の図書館等でも購入してもらい、結果として『全国棚田ガイド』が当会の表看板になったと思います。

杉山 **2019年に棚田地域振興法が成立しました。**

中島 この法律が出来たことは、棚田保全の歴史の中でもかなりエポックメイキングな出来事だと思います。私の最初の著作『日本の棚田』を出版したとき、ふるさときゃらば

んの石塚さんが発起人になって出版記念パーティを帝国ホテルで催してくれ、その場に和歌山県選出の西議員がひょっこり現れ、棚田議連を作ることを表明してくれました。その後、棚田地域の選出議員に呼びかけ超党派の議連が結成され、棚田連絡協議会の役員会が東京で開催されるときは議員会館にも表敬するようになりました。そのような活動が、棚田地域振興法へつながったと思います。



杉山 そういった流れが、2021年の「つなぐ棚田遺産」の選定に繋がると思うのですが、今後も行政へのアプローチはますます大切になってくると思います。特に百選の棚田のうち約3割が再応募しなかった棚田地域の厳しい現状もありますよね。

中島 1999年に百選の棚田が選定され、翌年、「中山間地域等直接支払い制度」が始まりましたが、それ以外の棚田に対する具体的施策はほとんど無かったと思います。各県に作られた「棚田地域水と土保全基金」による事業もうまく活用している所は少なかったと思います。今回、つなぐ棚田遺産は、棚田地域振興法を背景に、どちらかというと面の広がりを持つ地域として選定されており、地域全体での保全の動きに期待したいと思います。当会でも杉山代表を中心に行政への働きかけはどんどんして欲しいと思います。

杉山 私が関わった坂折棚田も十四ヘクタールあるのですが、現在、オーナー制度で活用されている棚田は約3ヘクタールで、残りは機械で農作業が安全にできるようになって保全されていると思っています。今回、つなぐ棚田遺産として選定地域が百七十ヘクタールに広がりました。整備された棚田がほとんどですが、旧中野方町全体を活性化させたいという意欲が感じられます。

最後に、棚田地域が抱える課題は多くありますが、これから活動をする上でアドバイスがあればお聞かせください。

中島 私はこれまで構えることなく自然体で対処してきました。設立当初からの会員であり、連絡協議会の個人会員第1号でもある木戸さんは、十日町市の棚田地域で育ち棚田があるのが当り前の感じで一緒に活動してきました。ですから杉山代表も構えずできることをしていけばよいと思います。

杉山 私は農家の要望を聞き、いかに事業に活かしていくかを仕事にしてきました。棚田地域の抱える様々な課題を、棚田保全を直接担っている農家の声を聴き、行政に要望したり、都市住民のニーズにどのように活かせるか、「棚田の応援団」としてできることを着実に活動していくことを心掛けたいと思います。今後とも元気でご指導よろしくお願いします。

■撮影協力
Plenus米食文化研究所
■撮影場所
細川護熙作「棚田の四季」の壁画前

冬のはさ木

フォトエッセイ

日本の原風景

「古志の里」

写真・文 中條 均紀

新潟県では「はさ木」といって、畦にタモの木を植え、縄や竹を組んで稲を干す風景をあちこちで見かけました。近年は機械化が進み「はさ木」は伐採され、ほとんど見られなくなりましたが、山間地の棚田では今でも杉の木を利用した「はさ掛け」が行われています。最近では「はさ掛け」、天日干しによる米の品質の良さが見直され、付加価値を付けて販売しているケースが増えているようです。

上の写真は、雪の降っている夜明け前の「はさ木」風景で、街灯の光が雪にあたり斜めに雪の筋として現れています。絵画や版画と見間違うような一枚ですが、豪雪地の幻想的なシーンを撮ることができました。

古志の里は豪雪地帯で積雪量は3mにも達し、棚田は跡形もなくなります。しかし、3月になると雪解けが進み畦の輪郭が現れ、上空からドローンで見ると棚田の形が良くわかるようになります。

上空から見た
豪雪の棚田

中條 均紀 なかじょう まさのり

1952年新潟県三条市に生まれる。1986年から写真撮影活動開始。1990年より東京富士フォトサロン等で個展を開催する。2002年新潟県美術展覧会無鑑査作家となる。2004年川口にアトリエShinlaを建築。2005年第14回林忠彦賞を受賞する。同年徹子の部屋出演。同年中越地震チャリティー写真展を全国50ヵ所以上で開催。出版物は『古志の里』『古志の里II』『山古志村再び』『古志の里春夏秋冬』他。現在、写真教室、コンテスト審査員、講演等の活動を行っている。

1：本山棚田（『棚田の朝』撮影：青木英雄）／2：棚田アート（作業中）／3：棚田コンサートの取り組み／4：都市との交流

棚田遺産に選ばれた風景
土佐・本山　天空の棚田群
～人をつなぎ、未来へつなぐ棚田～

高知県長岡郡本山町の棚田

棚田のある本山町について四国のおへそ！

本山町は、高知県の最北部、四国のほぼ中央部に位置し、標高は250m～740mと急峻な山地に囲まれ、面積の89・1％を森林が占めています。北側には四国山地の険しい峰々が連なり、吉野川が地域のほぼ中央南寄りを東進しています。

吉野川沿いには河岸段丘と細長い平野、大きな扇状地が形成され、四国山地の中にあって、ぽっかりと口を開けた平野部が作り出され、まさに四国のへそといえる場所です。

歴史から現代に繋がる集落

本町の集落は、出土した土器から縄文時代早期（約7千年前）であることが確認でき、縄文時代前期から後期初頭（約3千～4千年前）には、太平洋側の影響を受けながら、独自の発展を遂げた土器「松ノ木式土器」を創り出しました。山間部にありながら、出土物に海産物等が確認でき、四国最古のひえも出土していることから、他地域との繋がりを持ちながら、古くから人や物が行き交い交流を深めることで、集落が活性化し、産業が発展してきた歴史をもつ地域となっています。

土佐・天空の郷の誕生！地域振興と農産物の供給の促進へ！

本山町は、昼夜の大きな寒暖差や、山々から湧き出す清らかな水、肥沃な土壌から、これまで良質な米を生産してきました。しかしながら、米の消費低下をはじめ、農業を取り巻く環境は厳しいものがあり、農家は危機感を抱いていました。また、行政も稲作の衰退に頭を悩ませていたところ、「将来に希望が持てる農業にしよう。もっと良い米を作ろう！」と、行政と町内の多くの農家が一致団結。平成21年に本山町特産品ブランド化推進協議会が発足

し、専門家のアドバイス、消費者や流通業者などの意見も参考にしながら、ブランド米「土佐・天空の郷」を誕生させました。

土佐・天空の郷は、これまで、お米コンテストINしずおか2010と2016で、史上初となる特別最高金賞を二度受賞し、米・食味分析鑑定コンクールでは、都道府県代表お米選手権で金賞を受賞しました。コメの食味ランキング（日本穀物協会発表）では、「にこまる」が4年連続で最高ランクの特Aを獲得するなど、ブランド米としての地位を確立してきました。

また加工品・特産品開発では、令和2年度には、ブランド米を提供するショップである「おむすび処　こめのみみ」をオープン。県内食材・地元食材を具材化することで、地域経済の活性化を目指しながら、おむすび一つ販売毎に10円を農家に還元する「おむすびプロジェクト」を伴走実施し、農家所得向上と棚田保全にも取り組みました。

地域の振興では「棚田アート」、「棚田コンサート」を開催し、今後は植え付け・収穫体験アクティビティを計画中。棚田を学習教材とした修学旅行などの受け入れも実施しています。

人をつなぎ、未来へつなぐ棚田　つなぐ棚田遺産へ

本山町の歴史は、過去から今に繋がれ、南部の棚田群でもその土地の歴史・文化が熟成されてきました。このことから、後世に対し、適切に引き継いでいく事が地域の共通認識でした。

また、棚田が持つ副次的効果から、集落活動が盛んであったことから、中山間直接支払制度や多面的機能支払交付金などを活用し、農地保全・農村の有する多面的機能の維持・発揮を図ってきました。

そんな中、棚田地域振興法が新たに施行されたことをきっかけに南部の集落協定を中心に行政と本山町棚田地域振興協議会を設立し、活動を開始。

令和3年度に「人をつなぎ、未来へつなぐ棚田」をキャッチフレーズに、棚田遺産に申請し、認定されました。

ブランド米である土佐・天空の郷を生産する棚田での農作物の供給促進等の活動を通じ、地域の人・もの・ことを「地域財」として発信することで、消費者や販売者が産地に訪れるきっかけを作り、新たな地域づくりに生かしていきたいと考えています。

（本山町まちづくり推進課　上地郁哉）

棚田へのアクセス

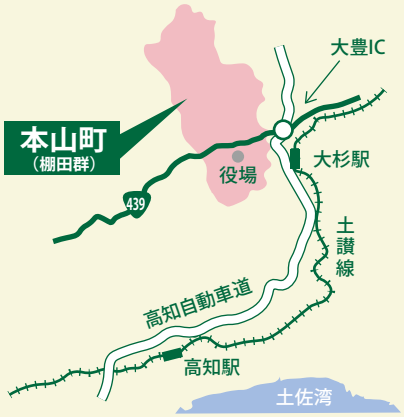
【公共交通】　JR土讃線大杉駅前から役場までタクシー利用で15分

【自 動 車】　高知自動車道の大豊ICより国道439号を西方向へ向かう。ICから役場まで10km

お問い合わせ

本山町役場まちづくり推進課
Tel. 0887-76-3916

高知県 本山町



おむすび処　こめのみみ

モンベルアウトドアヴィレッジ本山

地域おこし協力隊 棚田班

徳島県上勝町 地域おこし協力隊
片桐 悠

皆様、はじめまして。2022年の6月より地域おこし協力隊として徳島県上勝町に赴任した片桐 悠と申します。上勝町は「ゼロ・ウェイスト活動」や葉っぱビジネスである「彩（いろどり）」産業が有名な町ですが、実は、貴重な棚田が数多く残っています。八重地の棚田や樫原の棚田など江戸時代から土地利用区分が変わっていない場所も多く、今年の「つなぐ棚田遺産」には町内から5つの棚田が選定されました。

しかし、上勝町の棚田がある集落は一般的な中山間地の集落と同じく、少子高齢化に伴う田んぼの荒廃や後継者不足といった問題に悩まされています。現在、私は活動の一環として、棚田オーナー制度の事務局や、棚田に関するオンラインイベントの企画運営といった事業に携わっていますが、町内外の他の取り組みと比較すると、まだまだ棚田活動の認知度は低いと感じています。

認知度が低いということはそれだけ伸びしろがあり、問題の改善につながる可能性も秘めています。12月7～9日には、東京で開催されたエコプロ2022の「日本の棚田共同展示コーナー」で、上勝町の棚田の魅力を多くの方に発信しました。このような取り組みを通して、少しずつ問題改善につなげていきたいと思います！

八重地の棚田

生きもの屋の里山考

文・写真 （株）環境指標生物 内田大貴

冬の生きものどこにいる？
～田んぼに棲むドジョウ～

田んぼでは、秋の稲刈りも終わって水もなくなり、寒さも深まる中何処か寂しい風景になりました。また、生息する生きものたちも、春を待つためにそれぞれの寝床で冬越しの準備をしていることでしょう。さて、暖かい季節にたくさん活動していた生きものたちは、この冬の間一体どんな寝床で眠るのでしょうか？ 今回はその一例をご紹介します。

「ドジョウ」は、髭のある愛くるしい顔をした魚です。代表的な住みかの一つに棚田のような田んぼがあり、水も豊富な田植えの季節には、素早く泳ぎ回る様子が見られます。ですが、寒くなって水がなくなる秋から冬の季節はどうしているのでしょうか？

なんとこのドジョウは、田んぼの水がなくなると、湿り気のある土の中に潜り、そのまま冬を越すために眠るのです。他の魚と違いドジョウは、体が湿っていれば、水がなくても皮膚から呼吸できます。さらに、土の中は外敵に見つかりづらいので、水はけが悪く冬も湿った田んぼは、ドジョウにとっては厳しい時期を乗り越えるための安心な寝床なのでしょう。

しかし、近年は田んぼ周りの護岸等により乾燥化が進み、寝床となる湿った田んぼは年々減少しています。人間のみならず、見えないところで厳しい季節を乗り越えるために田んぼを利用している生きものがいることも、多くの方に知ってもらえると嬉しいです。

田んぼで冬越しをするドジョウ

棚田博士は今日もイク！

中島峰広の全国棚田行脚

別府市街地北郊の棚田

大分県別府市内竈

別府市は大分県の東海岸、ほぼ中央部に位置し、鐘状火山の鶴見岳東斜面、石垣原と呼ばれる扇状地上に市街地が広がる。温泉湧出量・源泉数ともに日本一の国際観光温泉都市である。内竈（うちかまど）は、「つなぐ棚田遺産」に別府市で選ばれた5つのうちの一つ、中心市街地に最も近く、直線距離にして北へ7キロの地点にある（選定名は堂面棚田）。

2022年6月下旬に内竈を訪ねた。そのルートは比較的簡単で、別府駅から日豊本線を北の小倉方面へ向かい、2つ目の亀川駅で下車。駅の東側、南北に走る国道10号を北上、最初の信号を左折、国立別府病院北側を走る直線道路を山際まで進むと内竈の集落だ。集落内の道をさらに西へ進むと釿（ちょん）の掛（かけ）集落、ここから丘陵を北へ越えれば関ノ江新町とスパランド豊海の2つの団地があらわれ、後者の西、山側に目指す内竈の棚田がある。

別府湾を眼下に

棚田は標高60～160メートルの東向き斜面に分布、「つなぐ棚田遺産」の一覧表によれば面積9ヘクタール、荒廃面積4ヘクタール、荒廃率42パーセント、枚数200枚、勾配7分の1、法面構造は複合となっている。一部は昭和62～63年にかけて個人による畝町直しが行われ、3～4枚が1枚にまとめられ、法面は石積みから土坡に変わった。そのままの棚田は放棄されて、大部分は農道から遠い中央部に集中し、法面は石積みのまま、石積みの高さは1～2メートル、1枚の広さは1～2アール程度である。

一方、農道に接する整備された棚田は、法面が土坡に変わり、広さは6～7アール、最も広いものは16アールほど。法面の高さは2～3メートル、最も高いものは5メートルを超えるものもあるという。

ところで、ここの棚田が持つ最大の魅力は別府湾を眼下にする眺望だ。北は国東半島の山並み、南は大分市街地、新産業都市の名を賜った臨海工業地帯の煙突群、そして晴れた日には四国の佐多半島まで望むことができるそうだ。

集落の重鎮・恒松さん

棚田では、頼もしい3人の個性的な守り人にお会いした。まず内竈水

中島 峰広（棚田博士）

早稲田大学名誉教授。学術博士。NPO法人棚田ネットワーク名誉代表。全国棚田（千枚田）連絡協議会理事、棚田サミット開催地選定委員会委員長。1933年宮崎県生まれ。早稲田大学教育学部地歴科卒。2004年まで早稲田大学教育学部教授。著書に『日本の棚田―保全への取組み』『百選の棚田を歩く』『続・百選の棚田を歩く』『棚田 その守り人』（以上、古今書院）。現在、百選外の棚田についての執筆準備のため全国行脚中。

利組合と内竈採草組合の組合長を務める集落の重鎮、恒松達美さん67歳。妻と施設に居る母親の3人家族。高校卒業後、専門学校で農協経営学を修めJA別府農協に入所、平成22年別府日出農協に改組された時、一旦退職、翌年の平成23年に嘱託として再入所、2年後に役員になり、平成30年63歳の時に退職した。

平成22年、55歳の時に父親に代わりすべての農作業を担う兼業農家になり、所有する水田70アールのうち、40枚から9枚に畝町直しをした50アールを耕作している。農機具はトラクター24馬力、コンバイン2条刈を所有、田植は作業委託しているという。庭先の別棟には近隣の5家が共同で引いた温泉があり、農作業から帰ると直接湯殿へ、温泉に浸かる気分は最高だそうだ。

組合長を務める2つの組織のうち、まず水利組合は枯れることのない冷川上流の湧水を水源としており、小坂と竈の分水工から長さ3キロ以上のU字工水路で引水している。役員9名、組合員30名弱の小さな組織で運営は厳しく、5月と7月に行う井浚いと草刈には25名前後が参加、不参加の人からは課不足金として3000円を徴収しているという。採草組合はかつて牛を飼っていた時代、現在自衛隊の演習場になっている十文字原は内竈を含む近隣集落の採草地だったところ。その権利を保持するための組織、実際の作業は春先に行われる野焼きに参加する程度だそうだ。

地域内ーターン遠藤さん

恒松さんが頼りにするのが来住者の遠藤高幸さん74歳だ。出身は国東市、地元の国東農高を卒業と同時に就農、父親を助け、水田80アールと畑49アールを耕作、農閑期には建設会社で働いたそうだ。ここでユンボ・ブルドーザー・チェンソーなどの運転、使用免許を取得したことが、後に大きな力になった。

昭和45年、22歳の時、別府市に移住、タクシーの運転手になった。それから10年間辛抱し、平成5年45歳の時、個人タクシーの営業許可を取得、稼ぎに稼ぎ、売り上げが1000万円を超える年もあったという。これだけで満足しないのがこの人の魅力。平成17年、58歳の時内竈にーターンしたが、タクシーの営業を続けながらも、農を目指した初心を忘れることなく、父親が残した農機具類を駆使して郷里の国東方面で友人3名と共同で米作りは続けていたのである。

令和2年、72歳になって今度は内竈で米作りを始めた。所有する機械類はトラクター2台（24馬力・25馬力）、4条田植機2台、コンバイン2台（2条刈・3条刈）。これらを熟達の腕前で操作、4戸の農家から10年間放棄され、ほとんど山に戻っていた水田70アール、11枚を借りて復田した。

借地料として各戸に30キロの米を

1

2

3

4

5

1～3：内竈の棚田／4：棚田の案内看板／5：守り人恒松さん（左）・伊藤さん（中）・遠藤さん（右）

あげると涙を流して喜ばれた。赤土の粘土質土壌は水持ちがよく、収穫される米は美味しいという評判。30キロ当たり採算がとれる8000円以上の値段で販売される。新居には100万円の利用権で取得した温泉もあり、恒松さん同様ご満悦の様子である。

守る会会長・伊藤さん

第3の守り人が伊藤繁幸さん72歳、農地を守る会の会長である。経歴が異色で高校卒業と同時に江田島の海上自衛隊に入隊、18年間在籍、年金がつくようになってから除隊した。除隊後、大津市で研修を受けた後、家電の販売・据付を行う自営業を呉市で立ち上げ、呉市出身の女性と結婚、所帯を持った。

58歳の時、父親が亡くなり、別府へUターンした。帰郷して水田15アールを畑として利用、トマト・ナス・キュウリなどを栽培、軽トラを利用して町へ売りに出かけた。60歳になって農業委員に立候補して当選、2期、6年間務め、組織の改変を機に退任した。その後農地を守る会の会長となり、多面的機能の補助金7000円のうちの3000円を活用して道路・放棄地・水路などの草刈作業を行っているそうだ。

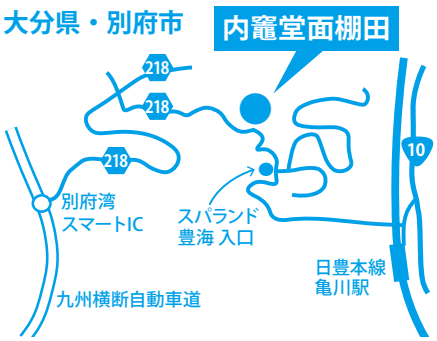
上・下：子供たちの田植え体験

市街化調整区域にある棚田

内竈は、「つなぐ棚田遺産」に選ばれた271地区のなかで、神奈川県秦野市名古木（ながぬき）と同様、棚田が市街化調整区域内にある例外的地区である。当然白地の農地のため棚田保全に有効的な施策とされる直接支払の対象外である。一方、都市に近接しているため棚田に関心を持ってくれる関係人口は多くなる。現に秦野市の場合、神奈川県や東京都の住民が毎週日曜日に自然に集まり、放棄地を復田し棚田保全の活動に多数参加している。同様に、内竈ではUターンやIターンした住民が本来の住民にかわり棚田保全に関わっている事例と云うことができるのではないだろうか。

田植えを待つ苗と別府湾

内竈堂面棚田へのアクセス



【公共交通】亀川駅前より大分交通バスの「関の江循環」バスに乗車し約10分の「スパランド豊海入口」で下車し徒歩10分

【自 動 車】九州横断自動車道「別府湾スマートIC」より県道218号を北上し、約2.5ｋｍの十字路を右折するとすぐ目 的 地。ICから4.5km

「四谷の千枚田」から

鞍掛山麓千枚田保存会　小山 舜二

四谷の千枚田は鞍掛山(883m)に降り注いだ雨が湧き水となり、すべての田んぼを潤しており、モリアオガエルやナガレホトケドジョウなどの希少種も生息、その多様性に富んだ「四谷の千枚田」では児童や学生を交えた稲作体験や野外観察会等が積極的に行われている。その一部を紹介する。

12月10日、市立鳳来寺小学校5年生(10人)と4年生(10人)の児童がスクールバスで千枚田にやってきた。今日は「田起こしと田んぼ飛び」だ。田起こしは1年間の稲作の始まりの作業で、昨年、千枚田活動に取組んできた先輩の 5年生と新学期から取り組む4年生の引継ぎでもある。田起こし(冬耕)をすることで、作り土の酸素供給、また凍ったり、霜柱が立ったりすることでバクテリアの繁殖を促し、美味しいお米が穫れる大切な作業である。等々の説明に続き、田起こしを開始。5年生が4年生に教える姿は真剣だ。早々に田越こしを完了。児童達は待ちに待った田んぼ飛びに挑戦、瞳が輝いている。急傾斜 1/6、石積の田んぼの高さは2mを超す落差だ、怪我のないように入念な準備体操を行い、飛び降りるコースを確認しながらスタート地点へ。「よーいどん!」の合図に我先にと飛び降りる。児童達は、もう1回、もう1回とアンコール。齢82にして児童たちと一緒に飛び降りたものの、流石の「ワイルドなおじさん」も2回目は遠慮した。児童たちの千枚田活動を取材する NHK のディレクター も「都会では考えられない行動だ、素晴らしい」とカメラを回していた。

代掻き:ワイルドなおじさんの田んぼ飛びに味を占めた児童たちは、今日の代掻きのハプニングを匂わす、いたづらっぽい瞳が可愛い。初めのうちは備中や鍬で代掻きを行っていたが、田んぼが狭く危険なため、手をつなぎ、♪向こうの正面だぁれ…などと、ふざけながらも真剣に代掻きを行った。

田植えや稲刈り後の沢遊びも、児童たちが野生に戻る瞬間で、「四谷の千枚田」から戴く自然体感(自然の叡智)の場でもある。

読者のひろば

読者の声募集！

「こんな活動をしています」「こんなことやります」という皆さんの声を編集部までお寄せください！ご要望、感想やご質問でもOK！（声800字まで、レポート400字まで。写真も添えて）

〒一六〇－〇〇二三 東京都新宿区西新宿七－一八－一六 トーシンハイム七〇四号「棚田に吹く風 読者のひろば」宛

メールでも受付けています ⇩ hiroba@tanada.or.jp

My Best Shot!

下赤阪の棚田　大阪府千早赤阪村

大阪府千早赤阪村 下赤阪棚田の会会長　千福清英

大阪府で唯一の村にある「下赤阪の棚田」は、平成11年に「日本の棚田百選」に認定され、令和3年度には「つなぐ棚田遺産」に認定されました。写真は令和４年５月に会員の皆様と撮影した認定書の記念写真です。活動は、下赤阪棚田の会のメンバーとボランティアの方が定期的に保全活動（草刈りなど）を実施し、また、蕎麦を栽培し、秋には蕎麦の実を収穫するなどの活動も実施しています。この様な保全活動を行うことで、遊休農地化を防ぎ綺麗な棚田の景観を維持しています。

棚田サミットレポート

埼玉県深谷市　岡田 洋民

コロナ禍の影響で中止になっていた全国棚田サミットが三年ぶりに滋賀県高島市にて開催されました。

関係者の皆さん、感染防止対策という厄介な障害を乗り越えての開催に、棚田サミットファンの一人としてお礼申し上げます。

一日目の午前は、高島市民劇団によるオープニングショウ、続いて開催セレモニー、基調講演。午後は四会場に分かれての分科会。それぞれに熱気のある部会であったと聞き及んでいます。

今回はコロナ禍により夕食を交えての交流会は残念ながら取りやめになりました。交流会は毎年大変好評で、各地の棚田保存会の方の色鮮やかな法被姿は農家の方の意気込みを強く感じさせるものであります。また、話が弾む起爆剤となっていました。次回はコロナ感染も収まり、交流会ができることを切望致します。

二日目は現地見学会二コースと観光エクスカーション四コースが催されました。自分が参加した現地見学会「畑の棚田」には五年ほど前に訪れたことがあり、そのときに案内をしてくださった人との再会はお互い涙ものでした。おそらく今回参加された多くの方も、私が感じたような出会いと再会があちらこちらで見受けられたことと思います。

気がかりなことは、棚田サミットに参加されている棚田保存会や農家の方は、ほとんどがおじいちゃんであります。しかるに自分は今年も十カ所くらいの棚田を探索しましたが、驚くことに田仕事をしておられるのは、おばあちゃんが実に多いことです。コンバインまでも操っておられるおばあちゃんも見かけました。米作りはおじいちゃんからお年を召したおばあちゃんにとって代わりつつあり、最後の砦になっているのが現実であります。

今まで通りの取り組みでは日本の原風景である棚田が壊滅してしまう恐れがあります。今後も棚田サミットの活力ある活動と動員力を通じて、棚田保全をさらに推し進めていただきたいと強く願います。

編集部イチオシ! BOOK & MOVIE

BOOK

ミニ図鑑 本木・早稲谷の昆虫

文と写真:
酒井敏光・大友治

本木・早稲谷 堰と里山を守る会

2022年10月

2022年3月に「つなぐ遺産」に選定された福島県喜多方市の上堰棚田。周辺地域の地勢からもたらされる生態系の豊かさが、このミニ図鑑に収録・表現されている。「虫は嫌いだ、という人は地元でも多数派かもしれません」と書かれているが、掲載されている百八十余の昆虫の写真と説明文は興味深く、「農家の味方」「際立つ存在感」「カッコいい!」「翅がオシャレ」「足速すぎ」等々、小見出しを見ているだけでも楽しい。

※公益信託福島銀行ふるさと自然環境基金により作成、非売品。入手ご希望の方は編集部までご連絡ください。

棚田へおいでよ！

棚田の共同出展としては7回目となるエコプロ2022。全国から6つの棚田地域、2つの県レベルの団体、2つの全国レベルの団体が集まりました。お馴染みのクイズラリーのほか、3年ぶりに「棚田・里山 酒めぐり」企画も復活登場し、棚田の多様な魅力をアピールしました。

エコプロ2022
日本の棚田共同展示コーナー

2022年12月7日（水）～9日（金）
東京ビッグサイト 東5ホール

棚田グループ共同出展企画 参加団体

- 四ヶ村の棚田（山形県大蔵村）
- 佐渡棚田協議会（新潟県佐渡市）
- しずおか棚田ネットワーク（静岡県）
- 高島市の棚田（滋賀県高島市）
- 和歌山県棚田等保全連絡協議会（和歌山県）
- 色川の棚田（和歌山県那智勝浦町）
- かみかつ棚田未来づくり協議会（徳島県上勝町）
- 東後畑の棚田（山口県長門市）
- 全国棚田（千枚田）連絡協議会
- 棚田ネットワーク

千葉県鴨川市
川代棚田でお米づくり

「つなぐ棚田遺産」認定で、活気あるお米作り無事終了

2022年の川代棚田でのお米作り体験は、3月に農水省の「つなぐ棚田遺産」に認定され、オーナー数も増え活気ある１年となりました。新型コロナウイルス感染拡大が続く中でしたが、無事、田植え、草刈り、稲刈りの行事を終え、10月10日に収穫祭を迎えることができました。収穫祭では、地元婦人部手作りのお寿司や焼きそばなどに加え、イノシシの丸焼きやしし鍋で獣害も食べつくす意気込みが感じられ、最後にはビンゴゲームなどにぎやかな収穫祭となりました。当ネットワークもコロナ禍で例年に比べ参加者が少なめでしたが、地元の協力により無事終了でき、収穫米も完売できました。

川代棚田は、全部で50枚ほどの小さな棚田ですが、庄司代表はじめ集落みんなの元気に支えられ、2023年もお米作り体験を続けていきますので、お気軽にご参加ください。

（杉山行男・上久保郁夫）

岐阜県恵那市
棚田ビオトープ プロジェクト

棚田ビオトープの稲刈り

ヒガンバナが咲く七十二節気の雷乃収声（かみなりすなわちこえをおさむ）の頃、晴天の中、9月25日（日）２名で棚田ビオトープの稲刈りをしました。本年はあまり稲が育たなかったので、１時間程で稲刈りが終わりました。

ご存じ方もいらっしゃると思いますが、ヒガンバナは花が咲いた後、晩秋に葉が出てきて、春に葉が枯れるといった、よくある植物とは違った生活サイクルで過ごします。違った見方をすると、棚田の畦畔の草刈りの必要が無くなった晩秋に葉が出て、草刈りが必要になる春に葉が枯れる、ということです。他の植物がいない冬に葉を茂らすことで、競争を避け、人間の農作業（攪乱）にも順応していると思います。これらヒガンバナの一部は、坂折棚田の飯田さんの指導の下、2005年に国際園芸アカデミーの学生が植栽したものです。ヒガンバナを見る度に、17年前に植栽したことを思い出します。

春の水溜りに卵を産むヤマアカガエルの卵塊を探す「第16回かえるの卵を探そう！」は2023年３月21日（火／春分の日）に開催します。（相田 明）

静岡県松崎町
石部棚田で昔ながらの米づくり

稲刈り～今年もできました！

10月8、9日に稲刈り体験を開催しました。2022年は2年ぶりに田植え、稲刈りの両イベントを揃って開催できました。参加者も総勢21名と、コロナ禍前の賑わいが戻ってきたようです。前日から大雨でしたが、ちょうど稲刈りの時間だけ晴れるという「稲刈りあるある」。三連休の事故渋滞にみな巻き込まれて到着が遅れましたが、そこはベテラン揃いで、あっという間に刈り上げて、天日干しを完成しました。

11月15日に、保存会が脱穀しておいてくれた籾を回収し、籾摺り精米をしている間に、スタッフ二人で昨年のお母さんの手ほどきを思い出しながら不格好な藁ボッチを作り、一年の棚田作業が無事終わりました。収穫量は籾にして99kg。今回は実験的に除草剤、化学肥料を一切使わずに作ったので、例年より25kg程度の減収となりました。作業に参加してくれた皆様、本当にありがとうございました！（高桑 智雄）

使いづらい、だけど美しい！始めてみよう〝旧暦生活〟

今年もできました！

令和五年 旧暦 棚田ごよみ

月の満ち欠けでひと月を知り、太陽の動きで季節の移り変わりを感じていた「旧暦」での暮らし。
旧暦棚田ごよみは、四季折々の美しい棚田の風景とともに、暦で「季節感」を味わうことのできる旧暦カレンダーです。

壁掛けタイプ

A4（縦210×横297mm）　※開くとタテA3サイズ

旧暦がわかる『ミニブック』付いてます！

¥1,300（税込）

5部セットがお得！贈答用にどうぞ！

5部セット ¥6,000（税込）

※送料は別途かかります。

注文サイト QRコード

ご購入は　TEL. **03-5386-4001** もしくは棚田ネットワークHPから
● お電話受付時間　13:00 ～ 16:00　※土日祝をのぞく

※このカレンダーは、旧暦の元日（令和5年1月22日）から始まります。
新暦表示は令和5年1月22日（日）から令和6年2月9日（金）までです。

棚田の応援団　わたしたちと〝棚田の応援団〟やりませんか！

棚田ネットワークは「棚田の保全に協力したい！」という会員によって自主的に運営されているNPOです。
消えゆく美しい"棚田"をどのように保全していくことができるのでしょう？ 一緒に考えませんか？ ぜひ、私たちと棚田の応援団になりましょう！

会員になろう！

私たちは、会報誌「棚田に吹く風（年4回）やホームページで豊富な棚田情報を発信しています。会員になりこれらの活動に参加してみませんか？

年会費

○個人会員
- 維持会員　1口1万円（1口以上）
- 一般会員　4,000円
- 応援会員　3,000円
- 学生会員　2,000円

法人会員を募集しています！

私たちは、棚田を守るため、農山村の人々と都市住民双方の協力のもとに様々なプログラムを企画・運営しています。これらの社会貢献活動に賛同し、ご支援いただける企業・団体・事業主様を募集しています。詳細はお問い合わせ下さい。

年会費

○法人会員（賛助会員）
1口３万円（1口以上）

編集部から

石部棚田の私達の田んぼの稲の丈は低いが見事な黄金色に輝いていた。他の田んぼは、まだ若干青みがあり、稲の丈も高く育っていたので、地元の人たちは何でこんなに違うのか疑問だったらしい。

実は2022年は実験的に普段入れている化学肥料を完全に入れないようにしてもらったのだ。そのため土壌の栄養分を使い果たし、光合成を止めた稲が見事な黄金色になったのだ。つまり他の田んぼはまだ土壌に肥料が豊富で、稲は光合成をしながらまだ成長を止めていなかったのであろう。

栄養が少ない分、収量は前年比で25kg減。来年度もまた美しい黄金色の棚田を見たいが悩ましいところである。

ホームページのここを見て！

棚田ネットのWebサイトも見てみてください！

https://www.tanada.or.jp

棚田に吹く風
2023年 冬号 Vol.126

発行　認定NPO法人 棚田ネットワーク
〒160-0023
東京都新宿区西新宿 7-18-16 トーシンハイム 704 号
Tel / Fax 03-5386-4001
e-mail：info@tanada.or.jp　URL：www.tanada.or.jp
郵便振替口座：00100-7-151565

［今回の表紙］石部棚田　藁ぼっちづくり（静岡県賀茂郡松崎町）撮影：久野大輔